社会的時間論（2）

——経験社会学的覚書——

領家　穣

社会が体験的事実として与えられることから，社会がすぐれて時間的なものであるということが出来る。このことは，社会をそれぞれの現象について，すなわち，社会の運動の現れとしての現象を区分し，それらの現象における周期性を確認することが，社会的時間論の最初の問題であった。そしてこのことから社会の存在を諸現象にみられる周期の間の一定の秩序として捉えようとする。経験社会学的立場からは，この周期現象の成立する現象領域を確定し，そのそれぞれについて成立する周期を確認するとともに，一つの社会のもっているこれら周期の間の関係を問うことが問題となってくる。このような周期現象は体験の問題であるとともに，それがどのような形で客観化されるかということの問題である。社会を静学から始めるという従来の社会学に対して，それが本来動的なものであるとの立場において，はじめて社会的時間の問題を扱うことが出来る。社会の秩序をこのような動的な立場から扱うためには，このような秩序の意味を明らかにしておくことが必要であろう。一般に社会秩序という場合，規範的要因が重くみられる傾向があるが，ここでは二つの意味における秩序を区別しておきたい。一つは最も抽象的な意味で，要素の集合の中における一定の要素の選択と配列の型を言い，いま一つはある特定の選択と配列の型の実現もしくは維持の努力をさしていう。

この場合，社会に関してはそれが時間的性格を本質的に与えられているという意味で，要素の時間的特性における秩序性が問題とされる。この場合一つの社会の秩序が上記の二つの意味をもつとすれば，時間的特性は，一定の要素の配列の時間的同期性という意味と，他の配列の実現への努力という二つの意味をもつこととなる。この意味で，自然的過程における時間的特性の変化——これは二つの意味で問題となる——と，一定の時間的特性の配列の実現への努力との間の一致が問題となってくる。社会を動的に捉える方法の必要性は，この二つの意味における秩序の統一の問題にかかわっている。

I，社会の基準としての時間と社会現象の測度としての時間・社会秩序が二つの意味をもつことについて述べたのであるが，その意味で，社会的時間は二つの意味をもっているといえる。社会が動的な過程であるということは，このような動的な過程の中に定常的な周期現象を見出すということと，このよう周期におけ同期または同調の問題が含まれているといえよう。個々の現象における周期の間に一定の同調または同期性が維持されている場合に，われわれは社会秩序が保たれているというのであるが，このような同調性——自然に成立するものとしての周期の間の同調——を，あるいはこの同調において捉えられた時間は，二つの意味をもってくる。この同調において捉えた周期を単位とする社会的時空を社会的制度としての時間というのであるが，また一方でこのような同調は特定の時間的制扼のもとに捉えられたものであって，秩序維持の努力に関して見れば，このような同調において捉えられた周期を単位とする時間は，ある特定の時・空の条件をはずして一般的に論ずる場合には，単なる同調への目安であるか，または同調の基準として考えられるに過ぎない。その意味で前者は社会における事実の制度化であり，後者は規範的な意味における制度である。後者の立場からみるときはその背後に事実としての周期の問題と，規範としての周期の問題が存在

している。したがって，この事実における周期を問題とする社会的時間は，社会の測度としての時間ということになり，規範もしくは基準としての時間と明確に区別されることが必要となる。

経験社会学の立場からは，このような両者を区別する意味から，社会をどのような角度から捉えるかということが問題となってくる。

それは社会的秩序が，要素の時間的特性に関する同調の問題であるという点から，必然的に要素の実現値が単に周期をもつということではなくてこのような周期の相互的同調に関するという意味で，社会的時間こそ社会変化の測度として最も重要な意味をもっているということが出来るのである。したがって，われわれの立場においては，どのような現象を如何なる意味で，社会の要素として取り出すかということが問題となるとともに，これらの現象について認められる周期性が如何なる意味で，どのような実現値について成立つかということである。これらの問題はすべて，体験的的事実としての社会の本質において捉えられたものを基礎として要求する。すなわち，本論における問題は，社会を動的過程として捉えるという立場から，(1) この運動の客観的な投影として如何なる現象を選択するかに関する問題，(2) この現象を如何なる意味において周期をもつというかという問題——実現値における再帰が，社会の運動に関して如何に意味づけることが出来るかという問題 (3) これらの諸現象における周期の同調を可能にする機制の問題の三つに区分することが出来るであろう。

Ⅱ，現象の選定と周期および同調の定義

1.変量　周期とは何か。実現値における再帰といった表現は，まず何らかの意味で，周期現象が具体的な量をもっていることが必要である。このような量を考えるとまず社会的な量は，空間および時間といったものの他に個体数——属性をもつ——が問題となる。このような属性が社会の運動に関して，どのように選ばれるかが問題とされるであろう。すなわち，このような属性が社会の運動の存在を指示するものでなくてはならない。例をあげると生産活動は生産物の形で示されるとともに，稼動機械の性能，稼動機械の台数，動力としてのエネルギーの消耗量，さらに労働人口稼動人口，失業人口，或いはまた資本の区分とその量，国富量，さらに生産組織の組織度または組織類型の分布といったものはすべて生産活動を示す量ということが出来るであろう。消費における諸々の量も後述の形式に応じて量となる。このことは人口移動の絶対量，種々の単位移動距離——移動主体単位別——これには単位時間当りの移動が問題となる。使用交通手段別，単位移動の距離・方向別さらには目的別，あるいはこれら移動の地域別分布，種々の製品別，資源ないし原料別，使用目的量もまた，その社会の運動を示す量である。これらはすべて具体的な数値をもつところの変量である。

以上の他に人間の意識の内部に存在するさまざまな基準に関する問題を反映する諸現象もまた変量としての意味をもつ。道徳や法の基準に関しては，種々の情報伝達媒体に現われた種々の作品ないしその他の型式（文学作品，CM．記事等）における道徳的基準の存在，ないし道徳に関する考え方の分類による分布，これらに関する取扱い件数，これに対する読者ないし聴衆の数，——種々の意味論的分析は，この量的把握の手懸りを与えてくれる——，法に関しては違反の件数といったものが量として考えられるが，これらに関しては裁判の具体的な法意識に関して，どのような違反の意味づけが行われるかによって，このような違反と基準の関係においてとられた件数もまた，変量としての意味をもつ。美における色彩と型式別分布，その他さまざまな型式別の件数，ないしこれに対する個体の側の反応の諸形式の分布といったものもすべて変量としての意味をもつ。さらに種々の作品における鍵言葉その他の意味論的分布——内容分析もまたこの意味で変量の構成に一役をかうこととなる。またこれら作品の分類別売行分布，ないしこれらを中心とする集団の分布といったものは変量として扱われる。宗教の分類とその分類別個体数，礼拝件数，こういったものに関する所属集団別，所属地域別といったものと時間別分布はすべて社会の運動を示す変量ということが出来るであろう。

2.　周期　これらの現象が周期をもつとは如何なる意味においてであろうか。これらの現象は基

準が示されることによってはじめてその違反ないし違法が明らかになるものと，美のように表現が中心になって，一つの社会に分布するもの，さらには経済的，人口的変量のようにその量自体が意味をもつものがある。

これらの中にはさらに種々の秩序を形成している集団の組織類型別の集団数，あるいはその全体としての運動を示すさまざまな現象——家族と行事数，あるいは世帯別生産高といった変量も当然これに属している——。周期はこれら変量の増減の関係における循環の要素を示すとともに，一つの系列に属する仕事の回路の完了，一定の行事の循環再帰といった質的な再帰も考えることが出来る。

このような再帰に要する時間は，質的な再帰にあっては，行事間の間隔——行事の配分における期間——が周期とともにその周期における位相を示すこととなり，これに対して変量における周期は，その増減において位相をもつこととなる。この場合，種々の変量の相互の関係は種々の関係においてこれを見ることが出来るが，心理的補完関係における型の関係は，対立する二要素の増減の位相の関係における一定値を求めることが後述の同調に関する場合がある。この場合，型式そのものにおける対立型——例えば，絵画における明確な描線による輪郭の明確なものと，ぼかした形式による表現形態の対立，円みを帯びた描法と直線的描法の対立から，色彩における心理的対立色，あるいは明度における濃淡の対立から，多彩と単色の対立といったものが考えられる。これは音楽においても種々の対立型が考えられ，しかもこのような対立は新しい複雑な対立を生み出すこととなる——の変量の分布の時間的な位相差が周期を構成することとなる。この場合，周期の規定は基線のとり方によって定まってくる。このような基線の選択における対立型の分布の頻度0から0までの間の期間が周期ということが出来るであろう。こういった実数および比率における時間の分布はすべて，その社会における周期として考えることが出来る。このような対立型式における周期の分析は，モリスの価値観分析においても用いられた方法であり，また基礎語集の変形による同系言語分裂の年代を推定する言語年代学的分析法もまたこのような周期に着目した方法ということこうことが出来るであろう。このよな周期に対して，一層困難な問題は，異った函数型を示す種々の変量における周期の問題である。この場合，一定量の生産ないし保有に要する期間を周期と考えることが心要となろう。

3.　同調または同期性

以上あげたような諸変量ないし行事についての間隔としての周期の間における同調の定義は極めて複雑な関係をもってくる。同調を可能ならしめる機制の項において後述する如く，これら諸現象の間の関係は，必ずしも二者の関係における如く ① 相互補完 ② 相互内在 ③ 対立の関係に分類しつくすことは出来ない。

物質的な媒介を必要とする原料と製品の関係においては，同調は原料生産と製品生産の間においては，前者のある数量を生産する時点が，後者がそれを要求する数量の時点と一致することが同調である。この場合においては生産に要する原料数Xと生産数量Yの間における一定の比率関係 α が両者の周期の全期間を通じて維持されることである。したがってこの両者の関係がこのような形で保たれることは，さらに販売の要素を含ませることによって，この三者の間の周期のずれの間に一定の関係を保つことである。これは現在，PERTにおいて分析されつつある関係である。一つの全体としての期間と周期の間の関係はこのような位相差における時間の最小化に向けられることとなる。

これに対して，感情もしくは情緒に訴える表現の世界の現象の関係は，これが個々の人々の感情のリズム（周期）の合成された形において，その分散の多元性の均衡を保つとともに，これらの周期の交替が上下の関係における人々の分散とその感情の周期に一致することが必要である。すなわち，個々の表現の周期は，さらに階層的な周期の合成として考えられ，これら二者の関係は，他の領域における周期と一致することが必要である。それと同時に，これらの周期は常に表現型について曖昧さの要素を含むものであって，このような周期は，この曖昧さの期間が感情の変換に要する周期と一致することによって同調が確保される。

さらに第三の意志的諸部門における同調は，技

術的変革の諸要素ないし知識の種類の変換に伴う他の諸要素の変換に要する時間との関係において決定される。と同時に現実における他の領域の変化——周期の加速ないし減速——に応じて，基準改定の時期が一致する場合に同調または同期性は確保される。

同調は現象相互間の問題であるとともに，種々のレベルの社会のもつ同一領域に属する現象の周期との関係によっても決定される。したがって ① 位相差 ② 時機——具体的な日時をもつ時点 ③ 周期そのものといった三つの面から，一致もしくは最小化といった形において同調は捉えることが出来ると云えよう。

Ⅲ. 同調を可能ならしめる機別について——全体社会を主とする社会的時間制機制について

1. 制度的時間の分類

すでに述べたように，全体社会はむしろ生成されつつある社会である。現在の段階で全体社会と云われるものに該当するものの背後には，つねに国家の及ぶ範囲が考えられているようである。この考え方の当否は，国家の範囲に存在するさまざまな集団のもつ周期が，これに対して基準として役割を果していると考えられる国家という集団が制度として示している時間によって同調の実をあげているか否かにかかっている。ここでは国家の示す時間的諸制度と具体的な社会の測度としての時間が同調しているか否かを検討する経験社会学的諸方法について概略することにしょう。

社会的制度としての時間の中にも幾つかの時間を考えることが出来る。

(1) すべての現象の測定の基礎となる時刻制度ならびに日附の制度

(2) 特定の現象領域に限定して，その行事を規定する行事予定表としての時間制度——会計年度，教育年度その他の時間制度をあげることが出来る。

(3) 特定の領域において，個々の現象に対して基準と考えられる現象規定が存在している。この基準は一定期間有効なものと考えられているが，このような期間に関する認識または判断を投影した制度的時間——例えば法は具体的な行為または行為の結果を適法または不法と判断する基準を示している。この判断が正しいものとする期間，施行や廃止の日時を含んでいる。

(4) 特定の社会的な行動または結果を齎そうとして，一定の目的を示し，それのためにとられる能動的行動の回路を示す。このような一回的な目標達成のための予定表としての時間——さまざまな政策や計画の予定表としての時間

の四つが，国家のもつ制度的時間といえよう。(4)の時間は，(2)の時間の一部に含まれるとも考えられるが，しかし(4)の場合には，このような予定表はその社会にとって一回限りの場合であって，これはかなり長期に亘るとか，あるいは半永久的に循環的に繰返される場合においては(2)の時間に含められる場合がある。これらの時間は相互に関係し合うとともに，これらの時間はまた現実の時間——社会過程そのものの進行の周期もしくは速度と関係する。全体社会における時間の問題はこのような時間の問題である。

ところでこれらの四種の制度としての時間を問題とする場合，時刻制度あるいは定常的行事予定表といったものの社会現象そのものとの係わりは特別に規定されることはないのに対して，後の二者は社会現象の意味内容が問題となるという点で前者と異っている。如何なる行為が社会的に罪と認められるか，あるいは，どのような関係がそこにおける正当な関係として認められるか，あるいは社会的に承認された機関——例えば大学——が具備しなければならない諸条件といったものは，一つの事態ないしは現象に関する認識や判断を含んでいる。ある事態や現象は一つの基準に照して正当であるとか不当であると判断される。このような基準が社会の中で承認されるため，一定の方法と手続きがとられることが必要である。またさまざまな計画の場合，例えば道路の敷設計画とかは，地域開発計画，また用水の開発計画といったものすべてこの計画の実施ならびにその前提条件に関する必要な手段の選択に関する認識ないし判断またこの計画の実施によって引起されると考えられる諸結果の，計画の実施に対する影響を考慮することによって，この計画の予定表が組まれることとなる。この点で計画はそれ自体が社会的な過程に対して直接的に関係する。上記の四種の時間は(1)(2)(3)(4)の順序に従って，社会的過程に対する

交渉の度合を深めてゆくということが出来るであろう。あるいは逆に最も直接的に社会に関係すると考えられるものと逆の順序に該当するとも云うことが出来る。ここで問題となるのは，通例(2)の時間は，国家が調整もしくは同調を図る意図で改定するものであるが，その背後には，これらの領域に属する現象は(a)それぞれ一定の周期をもっているとの認識ないし期待および(b)現象の周期相互の間における同調の事実の認識ないし期待が存在しているであろう。ところが，この点に関しては国家のとる経済政策とか，教育政策といった具体的な政策は，現実の社会における経済活動——この中には個々の会社の動きとそれに伴う生産の結果，さらにこれに対する他の会社や団体あるいは個人の動きといったものを含んで要求される経済的な結果を引き起す——や，また教育のある一定の結果を引き起すために，現状についての判断，それに作用する法則を考慮するとともに，その結果を引き起すのに，選んだ手段の，手段としての妥当性の判断が，その具体的な内容である。この場合には，教育の方法，教育の場の構造といったものが問題となる。この中には社会の現状におけるさまざまな分布，人口の増減の見通しといったものが含まれる。その結果，上にあげた定常性をこの過程に関して必ずしも前提することは出来ない。その点でこのような前提の成立した社会は，極めて特殊な社会であったということが出来るであろう。あるいはむしろ，その社会における周期の変化とか同調の変化と可能性が極めて緩慢な時間であったということが出来るであろう。ここにあげた四つの時間は最も一般的なものから，最も特殊なものへの関係としてもみることが出来る。が同時に，これはまた社会の層——ギュルウィッチのいう深さにおける層——に対応しているといってもよいであろう。われわれが時刻制度と呼んでいるものは，社会的な体験として最も把え難いものから，極めて把え易いものまでの層を含んでいると云えるのである。したがって，これら四者はそれ自体一つの層的構造をもっており，その背後に層的な体験構造をもっているといえよう。

2.　社会的制度としての社会的時間

以上に述べた制度的時間は，それぞれの領域——人間生活の各領域——に対応しているという意味で，その内容領域をもつ。これに対して，社会的測度としての社会的時間の問題は単に各領域別の問題ではなくて，これらの諸領域が構成する全体の中で問題となってくる問題である。上記の(1)の時間に属すると考えられる時間は，現在では国家の範囲に属するものを考えてみた場合，ほとんどが物理学的時間をその基礎においている。そして物理的時間，生理的時間といったものは，それらの現象のもつリズムといったものに合わせて，その単位を選定するのが常である。ところが競技における記録といったものも，現実には単に生理的な現象として片附けることは出来ないように思われる。記録の更新は決して個人の特定の生理的能力とか努力に帰せられるべきではなくて，教育施設の用意や技術の水準，さらにはこのような技術の変革を可能ならしめるより一般的な知識や技術，さらにその背後にある社会的経済的諸条件といったものが重要な役割を果している。この場合，例えば，筋肉の発達やその諸条件に関する科学的知識，それを被教育者に伝えるための技術的条件，さらにその為に選択される具体的手段といったものが全面的に関係している。その意味で，社会の全体的な連関は意識化される以前に，現実の社会の中で進行しつつあるといえよう。

ブーツールは社会的時間の構造は[2]，オペレーション，回路，循環といった概念で捉えられるというが，社会的時間の速さはこの三者のそれぞれの組成を組織化することによって，飛躍的な変化の可能性をもつといえる。記録の更新ということは，一定の距離を走破するのに要する時間の短縮を意味しているが，これに関係する諸条件がより広い社会の条件の改変によって，回路の短絡，または一項の省略，さらにこのことによる循環周期の変化をその背後に含んでいると考えられる。産業工学の部門における諸発展はすでに述べた如くこれらの諸条件の同調の確保を基礎としているということが出来るであろう。

ここでの問題は，他の領域における加速——周期の変調（ある場合には回路の中におけるオペレーションの省略とか，またある場合にはある回路を他の回路によって置き換えることによって可能となる）——が他の領域においてどのような効果

を引き起すかといった問題となる。

したがって，上記の四つの時間の成立する現象相互にどのような関係が成立するかを明らかにすることが，ここでの問題となる。この問題は，さきの技術の例をとると，電波媒体の成立がどのように回路の短縮において意味をもつかといったことが最もよくうかがわれる。

例。

条件 1．電波による空間の縮尺（伝達速度の極大化）＝経験の範囲の拡大

条件 2．観念的媒体から感覚的媒体への転換＝経験主体の増加の可能性の増大

条件 3．電波の方向における同時多元。

条件 4．相互影響における加速性

図 1

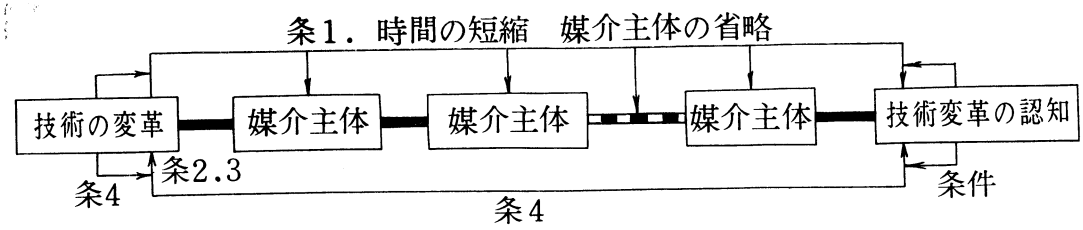

図1におけるように，これらの諸条件の総合的結果が，時間（技術の伝達）の加速化の前提条件である。これは特に (1) の時間および (2) の時間において著しい結果を引き起すとともに，(3) (4) に対してその効果を発揮する。特に(3)の時間に関して，その内容が (1) (2) の時間との対比において明らかにされることとなり，法や道徳といった抽象的領域において，社会の変化を直ちに受取ることとなり，その結果，この間における加速性が極めて大きいものとなる。このことは加速の初動のもつ意味を急変せしめる結果を引き起す。初動における極めて小さな時差は結果における大きな差を齎すことになる。このことは回路の増加ということによっても更に強化補足されることとなり，その結果，制度と一応無関係と考えられた(2)の時間が制度そのものと直接に関係することとなる。現在における社会的時間の問題は，主としてこのような諸領域における制度と制度的時間の間における不同調あるいは部分的制度の改変に伴うところの全体的不同調が一つの問題として現われて来ていると云えるであろう。

3．社会的時間と社会外的時間との関係

現象領域の問題をとりあげる場合，問題となるのは，社会外的現象と考えられるものが，社会的現象に転化する回路における変化の諸問題であろう。世代の問題は定常的な社会においては，それ自体，生理的年令が基礎となっており，この生理的年令の間隔は直ちに社会の他の現象に関して変化を引き起す結果はもたなかった。世代相互の関係は，その間隔がそのまま持続され，その間隔が経験の内容にまで関係することなく，一定の周期において繰返される世代の交替，補充によってその定常性を維持することが出来た。そしてこの定常性は世代の関係を制度化することによって一層安定したものとされてきた。さらに世代人口の問題も一定の安定した技術的条件の下では，その比率は一定に保たれていたが，医学技術の進歩，宗教的禁忌の弛緩その他による家族計画その他の手段による若年人口の減少，老年者の寿命の延長，その他社会的経済的条件の変化に伴う世代人口の比率が変化することになり，それと同時に上記のような情報伝達手段の変革といったものを基礎とする経験内容の拡大，経験の深化に要する時間の短縮といった条件の変化は，急激にこの世代間の関係に対する規範の内容と抵触することとなって来る。換言すれ，経験は成長という極めて自然的条件に規定されたものから，技術条件の変化による情報の同時伝達の可能性の増大といったことによって，世代の間の情報の相対的均一化を齎すこととなる。生理的条件の相違と，これに伴うところの生理的循環の自然的周期に規定されているところから生理的時間の単位が定常性を保ってるのに対して，社会的時間の単位はますます小さな単位がその間における現象の拡大に伴う内容の相対的拡大によて意味をもつこととなり，その結果，生理

的時間の規模と社会的時間の規模は，同調の型式を異にするに至る。人口構成といった問題が，社会的時間の同調，不同調に関する基準を曖昧なものとすることとなり，その結果，構造の不安定要素を現わすこととなってくる。この意味で従来，社会外的と考えられてきた要因についてもすべて検討することが必要となってくる。

心理的経験は単に内的な事実として考えられがちであるが，情報の増加，情報伝達回路の増加，さらに速度の増大に伴って，経験内容はますます増加し，経験領域相互の関係の組織化の進展によって，ますます社会の全体的情報の状態と個人的情報の状態とが接近する可能性を増加することとなり，その結果，社会的時間における同調，不同調に関する基準の曖昧さは，このような経験の拡大の機会をもつものと，もたないものとの間において増加することとなる。このことは(3)の時間と(2)の時間の交渉において一層明確となってくる。

社会的時間の体験は，このような視野の拡大とこれに伴うところの基準の多元化の可能性の増大と停滞の乖離，その結果の社会的な分化の激化，基準からの自己の距離による人々の分布による部分的組織の形成が結果する。このことは，全体としての情報の均一化の傾向とともに部分的な組織相互間の小さな相異のもつ意味を相対的に拡大することとなり，その結果，全体の同調を困難なものとする。同調についての問題は，(4)の時間の総合的検討を必要とすることとなる。

5. 大社会相互の間における問題

大社会における同調の問題は，特定の国家といった同調管理機構の存在の有無によって大きく影響されるといえよう。しかしながら，すでにⅢについて論じたように(1)(2)の時間は極めて形式的に規定されている。そのことによって，他の社会との交渉の如何によって，一つの大社会の内部における問題は，(3)の水準の時間に対して影響をもつこととなる。したがって，この管理機構の効率がよいほど，他方において大社会相互の間における(3)の水準の時間の意味を変更せしめることとなる。文明国と未開発諸国の間におけるさまざまな問題は，このような時間の問題として現われてくる。社会的時間の面からみた大社会の測度としての意味は，次のような諸変数についてのその構造から明らかにされると考えられる。これらはすべてその時間的特性から考えられることが必要である。

1. 各種の人口指数
   - ① 人口密度とその変化の様相
   - ② 人口密度の地域的分布とその変化の相
   - ③ 人口実的動的指数
2. 経済的構造
   - ① 交換の傾向
   - ② 労働の組織化
   - ③ 資産の相続
3. 時間的構造
   - ① 制度の諸領域における時間的基準およびその他の基準の変化の相
   - ② 諸制度における基準からの距離の分布（個体について）
   - ③ 情報伝達の媒体における回路の問題と各回路の情報伝達の特性
4. 集団における時間の同調（集団の分類）
5. 全体における時間の同調（全体社会の分類）

（末完）

註1) G. Gurvitch: La Voccation actuelle de la Sociologie, 2e éd., 1957

註2) G. Bouthoul: Biologie P.U.F. sociale（日高敏隆訳　社会生物学 1958）

参考文献は一括して (3) に掲載します。